

〈無量寿経〉の諸仏名

柴 田 泰

浄土教の主要經典（無量寿経）には、正宗分の最初に法蔵菩薩の師、世自在王仏に至るまでの「過去の諸仏」と、最後に他方仏国土の諸菩薩往生を説く章で、十三、四の諸仏（仮に魏訳に託して「十三仏」と呼称）を挙げてゐる。これらの諸仏名については、従来（無量寿経）諸本でのみ解釈されていたが、『仏名経』などにも相応する諸仏が数個所認められる。本稿では、こうした諸資料を検討することにより、新たに知られる二、三の問題について論及したい。

そこで、まず諸資料であるが、〈無量寿経〉の梵本、チベツト訳、漢訳五本のいずれにも、「過去仏」、「十三仏」は説かれてゐる。従つて、〈無量寿経〉ではその原初形態から存在していたことになる。その他の資料としては、「過去仏」については『仏名経（菩提流支訳）』に四個所、『十住毘婆沙論』易行品に一個所、敦煌仏名経（S 六七六一）に一個所の計六個所、『十三仏』については、『仏名経』に四個所、「易行品」に一個所の計五個所、いずれも訳語を異にして認められる。以上

が〈無量寿経〉の諸仏名に関する資料であり、諸異本を含めて十二、三個所に表われていることになる。なお、疑經の中に『無量寿経』（魏訳）の諸仏・菩薩をそっくり転用した事例があるが、ここでは混乱を避けて後に論及しよう。

次に、とくに本稿に関係する従来の見解を挙げると、第一に、〈無量寿経〉諸本の成立過程の問題がある。この点については、多くの先学が考究しているが、二十四願系から四十八願系、そして三十六願系という見解が有力と思われる。第二に、「十三仏」の章の対告衆が阿難から弥勒に代つてゐる構成上の問題がある。この点については、藤田宏達博士が「この部分がこの經典にとつて、もともと異質なものであつたことを示している。」と原初形態に古層と新層のあることを指摘される。第三に、『仏名経』についてであるが、当該經典には〈無量寿経〉だけでなく、その他の大乘經典の諸仏も訳語を異にして数多く相応すること、おそらく数人の訳者による合様經典と考えられることなどをかつて考察したことがある。

そこで、これら諸仏名の関連性を探るために、諸資料相互の仏名を対照すると、全体的特徴としては、第一に、諸資料の訳語は異なり、一つとして他の漢訳からの転用は考えられない。第二に、おそらくこれらの原本は同系統と思われない。

漢訳仏名の中には比較できない訳語もあるが、全体的には相応するから、全く異質な素材とは思えない。第三に、とくに「過去仏」に関して、その数に著しく差がある。おそらく伝承の過程で異動のあつたことが予想される。第四に、『仏名経』の二箇所、「易行品」では「過去仏」と「十三仏が」連続して挙げられている。以上の特徴に従来の見解を勘案すると、われわれが〈無量寿経〉諸本でのみ考えていた問題の何点かが、より明らかに納得されるであろう。

まず第一は、過去仏数の異なっていることから、その成立過程が明らかになる。梵本と最も良く対応する漢訳資料は、その数からみても、「易行品」である。とくに梵本後半部（第四十二仏以下）はその他の漢訳には全く認められない。ところで、われわれは現行梵本が四十八願系であり、「易行品」の浄土思想もそれに類する発達形態であることを知っている。そうすると、その他の漢訳資料でほとんどの数を等しくする四十仏前後が「過去仏」の最初の形態、梵本・「易行品」の後半部は後に増広されたことになる。後半部には前半の仏名が三仏重複し、また類似の仏名も認められる点、「仏名経」には後半部に

相応する仏名が登場しない点なども、異なつた素材であることを示している。更に、漢訳に共通し、梵本・「易行品」に欠く仏名が原初的形態、『無量寿莊嚴経』には梵本・「易行品」のみに相応する仏名があり、『平等覚経』『無量寿経』には查定できない仏名が多い、などの点が知られる。これらの点は〈無量寿経〉諸本のみでも言えることだが、そこに他の資料を加えることで妥当性がより納得され、〈無量寿経〉諸本を考察する場合の一つの例証になるであろう。

第二に、「十三仏」に関して、その数は一、二の違いで大きな変動はない。こゝで問題になるのは、この章の対告衆が阿難から弥勒に代つている点である。前述したように、藤田博士は「もともと異質なものと指摘されるが、『仏名経』などに全く独立して認められることは或る別な素材であつたことを肯定する。われわれは同様の例証として、『阿弥陀経』の六方諸仏が仏名経類から素材を得て構成されたことを知っているが、『十三仏』の章も構成上の問題として同様に考えてよいであろう。

第三に、『仏名経』・「易行品」に認める「過去仏」と「十三仏」が連続して記述される点がある。〈無量寿経〉のみでは、全く別な章の諸仏として見過ごすが、こうした連続した形態を認めるとき、おそらく〈仏名経類〉では一類の諸仏とまとめられたことが予想される。「過去仏」と「十三仏」には重

複する仏名のある点、構成の上で異質な素材である点、『仏名経』には別々な事例と連続した事例がある点、発達形態の「易行品」では連記している点などから考えると、後に一つにまとめられた可能性が強い。このことは（仏名経類）での繋がりがないと考えられていた万余の諸仏も、初めは小部な素材が次第にまとめられて現行の経典になったのであり、個々の素材を見出すことが多仏思想の成立についての手掛りを示すものとして留意すべきである。

以上が諸資料から知られる二、三の点であるが、最後に疑經での引用例について指摘しよう。この場合、諸本の中でも『無量寿経』（康僧鎧訳？）であるが、その諸仏菩薩が『大通方広経』『仏名経』三十巻などにそっくり転用されている。この点については、本経が中国社会において如何に信奉されたかを示す例証と考えればよいが、ここで新たに指摘することとは、『十二光仏』が従来の見解より、更に古く認められる点である。（無量寿経）には、阿弥陀仏の光明の働きを強調するために種々の別称で説き、古来「十二光仏」と呼んでいる。従つて、それは阿弥陀仏の別名であるが、中国以降では夫々別々の仏と解釈され、疑經に登場してくる。従来指摘による⁽¹⁾と、その典拠は『大仏頂首楞嚴経』『九品往生陀羅尼経』であるが、前者は八世紀、後者は日本撰述とされている。それに対して『法経録（五九四年）』初出、仁寿三年（六〇三年）写經

の有する『大通方広経』に見出すことは、『十二光仏』別仏説の最も古い資料と云えよう。

以上、（無量寿経）の諸仏名について、二、三の問題に論及した。従来（無量寿経）諸本に限つて解釈されていた問題に、新たに『仏名経』などの相応仏名を対照することにより、とくに「過去仏」の形態については或る程度納得できる諸点が認められたであろうし、疑經の転用例も異論はないと思われる。しかし、第二、三の問題については、他の大乘經典の諸仏についても検討しなければならぬのであり、なお残された課題は多い。たゞ、こうした問題は広く多仏思想を資料的に跡付ける場合の重要な手掛りになることと思われる。

1 『仏名経』大正一四・一三四中、一七八上、下、一八〇上、

『十住毘婆沙論』大正二六・四二下—四三上、S 六七六一。

2 『仏名経』大正一四・一一九中、一五一下、一七八上、一八〇

上中、『十住毘婆沙論』大正二六・四三上。

3 たとえば、藤田宏達『原始淨土思想の研究』三八〇—三八八頁、宮地廓慧「大無量寿経異本対照私考（二）」（『印仏研』第二〇巻第二号）など。

4 藤田博士、前掲書、一七四—一七五頁。

5 拙稿「菩提流支訳『仏名経』の構成について」（『印仏研』第二四巻第一号）。

6 紙数の都合により、「比較対照表」は別に発表予定。なお、すべて音訳語を挙げる『大阿弥陀経』の諸仏は多く査定困難であ

り、以下の論述では考慮しない。

- 7 世自在王仏を含めた過去仏数は、梵本八十一仏（足利刊本補正、藤田宏達『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』四八一四九、一八五一—一八六頁参照）、チベット訳八十二仏、『大阿弥陀経』三十四仏、『平等覚経』三十七仏、『無量寿経』五十四仏、『無量寿如来会』四十二仏、『無量寿莊嚴経』三十八仏、『仏名経』四十五仏、四十一仏（他の二個所中途）、「易行品」九十一仏、「S六七六一」四十八仏。
- 8 藤田宏達「インドの浄土思想」（『講座東洋思想』6、二八一—二九頁）。
- 9 梵本の過去仏が漢訳諸本よりも「易行品」に相應する特徴は、本経の最初の声聞比丘が漢訳諸本よりも『ラリタヴィスタラ』に對應する点と共通している（拙稿「無量寿経説法会の比丘衆」『札幌大谷短期大学紀要』第四号）。
- 10 藤田宏達『原始浄土思想の研究』二二—二二二頁、拙稿「阿弥陀経」六方諸仏の異名」（『印仏研』第二三卷第二号）。
- 11 『大通方広経』大正八五・一三四二下—一三四二上、一三四三上、『仏名経』三十卷、大正一四・二三九中、二四三下、二四四中、二五八上中、二七一中。
- 12 たとえば、望月信亨『浄土教之研究』二二—二四頁。
- 13 望月信亨『仏教経典成立史論』四九三—五〇九頁、牧田諦亮『疑経研究』四〇七頁。
- 14 『法経録』卷二（大正五五・一二六中）、S四五五三 題記。

（無量寿経）の諸仏名（柴田）

執筆者紹介（三）

- | | |
|-------|---------------|
| 山下幸一 | （大谷大学大学院） |
| 丘山新 | （東京大学大学院） |
| 舟橋尚哉 | （大谷大学専任講師） |
| 本部圓成 | （仏教大学助手） |
| 泰治人 | （大谷大学大学院） |
| 清水要晃 | （立正大学大学院） |
| 佐藤悦成 | （駒沢大学大学院） |
| 永田瑞 | （仏教大学助手） |
| 小谷信千代 | （大谷大学大学院） |
| 佐藤彰顕 | （名古屋音楽大学講師） |
| 本庄良文 | （京都大学大学院） |
| 土屋好重 | （愛知学院大学教授・経博） |
| 湯田豊 | （神奈川大学助教） |
| 久保田周 | （大阪基督教短期大学助教） |
| 山本啓量 | （石川県農業短期大学教授） |
| 柴田泰 | （札幌大谷短期大学教授） |
| R・アピト | （東京大学大学院） |
| 加藤精一 | （大正大学講師） |

（一九五頁につづく）